七　宣教師フロイスからシーザーにたとえられた戦国大名

―龍造寺隆信の生涯―

龍造寺隆信肖像
（佐賀県立博物館蔵）

島原半島の有馬晴信は佐賀の龍造寺隆信に降伏し、その配下に属していましたが、しばらくすると薩摩（鹿児島県）の島津氏と結んで、反旗をひるがえしました。隆信は、これを知ると一五八四年（天正十二）大軍を率いて島原に押し寄せました。『日本史』を著した有名な宣教師フロイスは、この時の隆信の動きを同年の『日本年報』に、おおよそ次のように報告しています。「龍造寺隆信は、秘かに、すばやく戦いの準備をして、有馬側が少しも予想しないうちにことを進めました。それは、歴史上のジュグルタの熱心さも、ジュリオ・セザルのすばやい深い謀りごとさえ、隆信よりうまくいくことは無理だろうと思われるほどでした」と。ジュグルタは紀元前二世紀末の北アフリカのヌミディアの王で宗主国※ローマに対し反乱を起こした人物であり、ジュリオ・セザルはローマの終身ディクタトル（独裁官）として有名なジュリアス・シーザーであり、後にブルートゥスによって暗殺された人物でした。

フロイスがこのように書いたのは、領地獲得に奔走する隆信の姿に、ヨーロッパ

龍造寺隆信が今山の戦いで活躍した
家臣に与えた感状（佐賀県立博物館蔵）

や北アフリカのかつての歴史を思い出したからでしょう。有馬晴信はプロタジオの洗礼名を持つキリシタン大名で、宣教師を保護していました。そこで宣教師たちからみれば、隆信は「キリシタン教会のもっとも激しい敵」と見えていました。また反面、「名将であることを示した」「智慮と努力とにより…肥前国を征服」などの積極的評価もありました。この天正十二年の戦いは「沖田畷の戦い」と言われ、隆信にとっては最後の戦いとなりました。龍造寺軍は数万をこえる圧倒的軍勢をほこりながら、島津・有馬連合軍に敗れました。隆信は討ち死に、軍勢は総崩れとなり、生き残った家来たちは命からがら逃げ帰ったのです。「五州二島の太守」と称された隆信の領国もこの戦い以後崩壊していきます。これを立て直していくのが、隆信の従弟であり、義兄弟でもある鍋島直茂です。さて、隆信はどのようにして、シーザーにたとえられるほど成長していったのでしょうか。

龍造寺隆信誕生地の記念碑（佐賀市中の館）

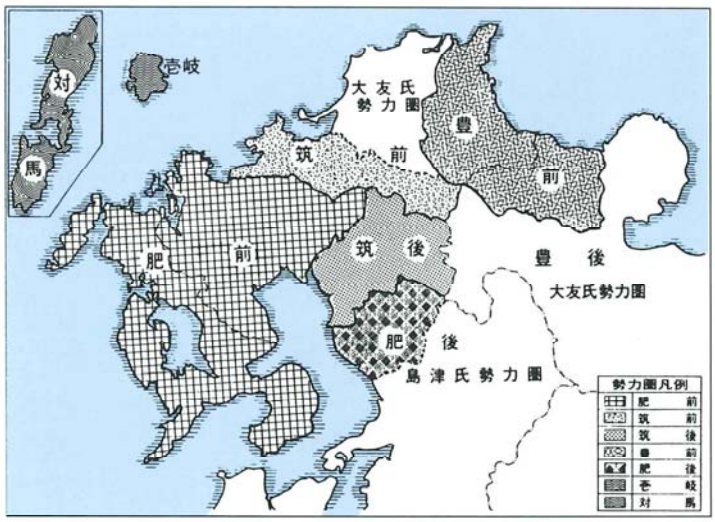
龍造寺隆信（一五二九―一五八四）が水ヶ江龍造寺家の当主になったのは一五四六年（天文十五）十七歳の時です。天文十四年に父や祖父をはじめ多くの水ヶ江龍造寺の人たちが、肥前の武将に大きな力をもっていた少弐氏の謀略によって滅ぼされました。そこで、出家していた若い隆信が還俗（僧侶から在家の人に戻ること）して家を継いだのでした。戦国時代がどんな時代であるのか、隆信は、父や祖父の無念の死によってはっきり知ったのでした。一五四八年、隆信は本家村中龍造寺家（佐賀県立佐賀西高等学校付近）を継ぎ、中国地方の大きな戦国大名で、とくに北

部九州に影響力をもっていた大内義隆と結びつき、天文十九年には義隆から隆の一字を与えられて、隆胤と名乗りました（それまでは胤信と名乗っていました。隆胤のあと、また名を隆信と改めます。）。この年、自信にみちた隆信は、家臣に「少弐・小田・江上を討って東を、有馬・波多を討って西を五年くらいで平らげよう。そのあと隣国へ出兵し大友・島津など九州を平定すれば、そのあと四国・中国へ乗り出すのは簡単だろう。」と言いました。周囲の家臣はその現実を知らないあまい無謀な考えを心配しましたが、その心配はさっそくその翌年現実のものとなってしまいました。

隆信は、周防（山口県）の大内義隆を大きな後ろ立てとしていました。一五五一年、義隆が家臣の反乱で殺されると、全く安定していたように見えた佐賀城内の力関係がにわかに変化して、豊後（大分県）の大友氏を後ろ立てとする龍造寺鑑兼（隆信の父の従弟）を当主にたてようとする動きが出てきたのです。隆信は佐賀城をおわれ、筑後へ落ちのび、初めて時代があたえた辛酸をなめることになりました。しかし、隆信は、この時代に忍耐と準備と決断を学びました。一五五三年、苦労の末に佐賀城を奪回します。その後、慎重さと大胆さをよく使い分けながら、譜代の家臣に加え、他国からの人材もどしどし登用しつつ龍造寺軍団を拡大養成していきます。こうして破竹の勢いの進撃がはじまりました。一五五九年には鎌倉時代以来北九州の伝統勢力であった少弐氏を滅ぼしました。

今山の戦いのあった大和町今山

その後、とくに隆信が九州の戦国大名のなかでも一段と頭角をあらわすきっかけとなったのが、一五七〇年の「今山の戦い」でした。急成長する龍造寺勢力を恐れた豊後の大友宗麟は、自ら久留米高良山まで出向きます。大友宗麟といえば、この時点まではまだ龍造寺氏よりずいぶん大きな北九州随一の戦国大名でした。宗麟の出陣を知ると近隣の武将は相次いで大友側に寝返り、佐賀城は孤立してしまいました。この時、隆信は、籠城案を捨てて、従弟の鍋島信昌（後の直茂）を今山（大和町）に出陣させました。今山には、大友方の主力大友親貞を総大将とする軍勢が陣取っていました。大友方は、龍造寺氏は小勢であるし、まさか今日攻撃に出ることはあるまいと思い、その夜は酒宴を開き、油断していました。信昌は、翌八月二十日の早朝に裏手から決死の奇襲を敢行して、大友親貞ほか、田原、吉弘など主だった武将を討ち取り、大勝利を得ました。



龍造寺隆信全盛期の勢力圏（『佐賀市史』第一巻より）

隆信は、この戦いで捕らえた肥後の武将城親冬に馬を与え、従者をつけておくり返しましたので、心ある武将と称されたようです。これをきっかけに龍造寺領国はあたかも力強く風船をふくらますかのように拡大していきました。一五八〇年ごろには、肥前のほかに筑前・筑後・肥後・豊前にも進出し「五州二島の太守」と称されるようになっていました。「沖田畷の戦い」の直前、宣教師フロイスが、シーザーにたとえたのは、このような隆信の姿だったのです。